追悼　青木憲二先生

青木憲二先生は、平成 24 年 6 月 17 日に逝去されました。享年 58 歳。謹んでご冥福をお祈りいたします。

青木憲二先生は、1977 年 3 月に早稲田大学理工学部を卒業後、同年 4 月に同大学大学院理工学研究科修士課程（数学専攻）に進学され、1979 年 3 月に同修士課程を修了されました。同年 4 月に東京工業大学大学院理工学研究科博士課程（数学専攻）に進学されましたが、1980 年 3 月に退学して、同年 4 月に清水建設に就職されました。1982 年 9 月に清水建設を退職後、同年 10 月より日本工学院専門学校に情報処理科の教師として就職されました。1986 年 6 月には論文「Topological Study of Singularities of Differentiable Maps」で早稲田大学より理学博士の学位を授与されました。1988 年 3 月に日本工学院専門学校を退職後、同 4 月に専修大学経営学部講師に採用され、1986 年 4 月に助教授、1992 年 4 月に教授に昇格されました。2001 年 4 月にネットワーク情報学部に移籍されました。在職年数は 24 年になります。

この間に、青木憲二先生は、学生部次長（1 年）、学生部委員（1 年）、情報科学センター員（2 年）、入学試験委員会委員（1 年）、図書館委員会委員（2 年）、体育部委員（1 年）、体育部委員会委員（3 年）、自己点検・評価運営委員会委員（4 年）、自己点検・評価委員会委員（4 年）を歴任され、さまざまな分野で専修大学の運営に携わられるとともに、教育および研究に真摯に取り組んでこられました。

6 月 25 日に執り行われた青木憲二先生の告別式に読んだ弔辞を再録して私の追悼文といたします。

弔辞

青木先生、あなたの早すぎる死を残念に思います。

まだ 60 歳にもいっていません。

10 歳の子供がいます。

それなのに青木先生はなくなられました。

青木先生が専修大学にみえたのは 4 半世紀前でした。

文系の学生に数学を教えるのは容易ではありません。

きっと悪戦苦闘されたことと思います。

その苦闘の結果が、2003 年 4 月に朝倉書店から出版された「経済と金融の数理」でした。

青木先生は、読者が数学の知識がなくても、日常的感覚から自然に微分方程式を理解できるように工夫されました。

幾何学概論を教えるために苦労された結果が、2008 年 3 月に日本数学教育学会誌、第 90 巻第 3 号に掲載された「直角三角形をコンピュータに教えるには？　―三角形のモデル化と直角三角形のコンピュータによる判定―」であります。

青木先生が存命ならば、数理リテラシーを教えるために苦労した結果を、何らかの形の成果に結実されたことと思います。

しかしそのような時間はもはやありません。

青木先生は、決して器用な方ではありません。

壁にぶち当たり、悪戦苦闘の挙句、ようやく突破していくというのが、青木先生のやり方のように

思われます。

私を含めて、ネットワーク情報学部の教員が、そのことにもっと早く気づいていれば、青木先生の苦労をもう少し軽くすることができたかもしれません。

大いに悔やまれます。

4半世紀の間で、青木先生が一番幸せそうに見えたのは、リバプール大学で在外研究員として過ごされた期間ではないかと思います。

浅見経済学部長は、リバプールの川で釣りに興じている青木先生を見かけたことを私に話してくれました。

青木先生は少年のような笑顔で釣りをされていたとのことです。

専修大学に戻った後、森先生の研究室で夜遅くまで微分方程式について話されていた時の青木先生の笑顔も素敵でした。

プロジェクトの学生の成果について、青木先生がどの程度手助けをされたのか尋ねた時、「学生たちが自力でやりました」と少し自慢げに答えられた時の笑顔も素敵でした。

青木先生の笑顔をいつも見ることができたわけではありません。それだからこそ、時々見る笑顔が一層素敵に思われました。

もう写真の中でしか青木先生の笑顔にお目にかかれないことを悲しく思います。

取り留めもなく私の脳裏に浮かぶ青木先生への想いを、このような形でしか言い表せないことを、ご遺族の方々ならびに告別式にご出席の方々にお詫びします。

以上、私の弔辞といたします。

6月25日

ネットワーク情報学部長
伊東洋三